

No.2913

ポル・ポト政権期後の社会主義体制下カンボジアにおける教育再建の歴史的意義
—地方都市に生きた教師の人生・語りにみる認識と実践から—

名古屋大学大学院教育発達科学研究科

博士後期課程

千田沙也加

本研究は、ポル・ポト政権期後に成立したカンプチア人民共和国期（1979-1989年）の教育再建の歴史的意義を地方都市に生きた教師たち個人の経験に基づいて作成したライフヒストリーと語りから明らかにすることを目的とする。カンプチア人民共和国は、ベトナムとソ連の影響を受けた社会主義体制であり、政権が構想した教育再建も社会主義の理念を反映していた。先行研究や史資料が限られているため、政権側による教育政策の分析も重要である。

1年目の2018年度にはカンボジアで2度のフィールドワークを実施し、聞き取り調査と史資料の収集を行った。その結果、カリキュラムにおいてクメール語と「労働」を最も重要な教科として位置付けていることを明らかにした。クメール語は国民の言語と位置付けられクメール民族の民族性とは切り離されていた。また単純化され感情的な反ポル・ポト思想の形成が目指され、小学校低学年の教科書においても、凄惨な挿絵と共にポル・ポト政権期の残虐な行為を扱う課があった。「労働」に関しては、ベトナムとソ連の影響を強く受けた社会主義の理念に基づく教科として構想されていた。それに対し聞き取り調査では、教師たちはクメール語の意義としてクメール民族の文化の伝達と基礎的な能力の習得であるとした。反ポル・ポト思想については、人民共和国期に特有の教科である「政治道徳」で学習したとされ、相対主義的に認識されていた。「労働」に関して、教師たちはほとんど語らず、教育的な価値を見出していなかった。しかし、元児童によると「労働」が学校と家庭、社会を結合させる学びとして経験され、団結を学ぶ時間となっていた。教育政策と、教師による実践そして児童による学びというダイナミズムとして教育再建の意義を捉えることができた。今後は、より個々の人生を詳細に検討し教育の意義に迫る。そのため来年度は作成したライフヒストリーの確認をメインに調査を実施し分析を行う。